

# 2019 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	<b>17～18 世紀の浄土教絵画と説話・物語に関する基礎的研究</b>
キーワード	①中将姫、②掛幅絵、③絵巻

## 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ヒオキ アツコ 日沖 敦子	所属等	文教大学 文学部 准教授
プロフィール	室町時代から江戸時代前期頃までの説話や物語とそれに関わる浄土教絵画に関心をもって研究しています。作品の成立や制作の背景を探るため、寺院が所蔵する史料調査などフィールドワークが研究の基本スタイルです。文学研究というと机上で本を読むばかりというイメージを持たれがちですが、決してそうではありません。作品がどのような人によって求められ、どのような人々によって語られたのか、時に変容しながらもどのように受け継がれてきたのか、人々の心性や営みに寄り添ってこそ文学の世界は繙かれるのだと考え、研究を進めています。		

## 1. 研究の概要

本研究では、千年以上の時を経て存在する当麻曼荼羅（観経曼荼羅）とその由来を伝える中将姫の奇跡が、多くの人々に信じられ、語り継がれてきたという信仰的事実に注目する。

特に、室町時代から江戸時代にかけて、中将姫説話とそれにかかわる浄土教絵画が、どのような人々によって制作され、受容されてきたか、主に、中将姫所縁の寺として知られる青蓮寺（奈良県宇陀市）及び、近隣の個人や諸機関に所蔵されている史資料について、絵画やその裏書、付属の文書、箱書なども含めて精査し、作品の制作背景およびその担い手について具体的に検討する。

## 2. 研究の動機、目的

当麻曼荼羅と中将姫説話については、領域を問わない、先学の膨大な研究の蓄積により理解が深められてきた。しかし、説話がもつ豊饒な世界は、そうした研究史をもってしても未だ課題が山積している。特にもともと地方に伝来した掛幅絵や写本類には研究されていないものや、存在自体が知られていないものも多くある。**本研究では、従来の研究では取り上げられてこなかった未紹介の絵画史料などを具体的に調査し、広く学界へ紹介することを目的としている。**

このような研究を実現するためには、寺院での継続的調査、それによって確認された写本等の史料的価値の意味づけが不可欠である。史料収集にあたって、筆者がとる基本的な姿勢は、現地に足を運び、直接史料にふれる**実地調査（フィールドワーク）**である。調べる対象となる説話や絵画がどのような信仰のなかで、暮らしの中で求められ、生み出され、享受されてきたのか、この問題意識が研究を推し進める原動力となっている。従来の研究成果を踏まえ、研究を一層深化させる一方、新たな史料の発掘により研究の対象を広げ、調査によって新たに確認された絵画を含む諸史料を歴史的に意義づけていく作業が課題となる。

本研究は学問的価値を持つだけでなく、**現代社会において非常に重要かつ緊急性を要する寺院史料の発掘・収集を行う点で、歴史的かつ文芸学的な意義を持つ実証的研究である。また実社会にその価値を認めてもらうことを目指す点で、実践的かつ独創性を併せ持っている。**既に筆者は文献調査に加え現地調査を行い、説話がどのような在地伝承や在地の生活・生業と結びつき、定着しているかについて検討してきた。本研究はそのような研究の途上に芽生えた課題である。

### 3. 研究の結果

具体的には、中将姫説話研究のひとつの拠点となる奈良県宇陀市の青蓮寺所蔵の史料群及び関連する個人や機関での調査を進め、これまで明らかにされてこなかった青蓮寺の寺史を整理した。また、本調査によって新たに確認された中将姫説話関係の史料（中将姫説話を伝える絵巻や掛幅絵など）の制作背景について考察した。その成果として、「中将姫の九百五拾年忌—青蓮寺蔵『中将姫御画伝』の紹介を兼ねて」（『伝承文学研究』68号、2019年）及び『日張山青蓮寺縁起』の制作とその背景」（『日本宗教文化史研究』23—2号、2019年）に論考をまとめたほか、一般向けのブックレットとして、『時空を翔ける中将姫—説話の近世的変容』（平凡社、2020年）を刊行した。



- ・拙著『時空を翔ける中将姫』（平凡社、2020年）
- ・調査にご協力くださったご家族と筆者。  
個人が所蔵する史料に貴重な情報が埋もれていることもある。



- ・本調査で新たに発見された写本。中将姫説話研究において重要な史料となるが、虫損・水損が著しく、調査・研究が難航している。

### 4. 研究者としてのこれからの展望

本研究の成果を踏まえ、今後は青蓮寺所蔵の全体的な史料目録と資料集（カラー版図録）の作成を目指したい。未だ全貌が明らかではない所蔵史料の悉皆調査を進め、中将姫説話・伝承がどのような環境で語り継がれ、また創出されていったのか、そして、それらの史料が各地に伝わる説話・伝承とどのように関わりを持つのか、そういった点についてさらに調べを進め明らかにしていきたい。また、調査で確認した青蓮寺所蔵の写本を基とした一般向けの冊子の制作も計画している。地域の方や縁者の方に郷土への関心や理解を深めてもらうきっかけになればと考えている。博物館などで企画される展示との連携を図り、身近な地域の文化財がいかに

多くのことを伝えているか、物語や説話の世界を通して、文化財が物語る歴史に関心を持っていただくきっかけを提供していくことも目指したい。このような研究活動を進めることは、地域の文化財保護へも繋がっていくと考えている。

## 5. 社会に対するメッセージ

文化財の中には、その価値が見過ごされ、所蔵が確認できなくなってしまう例や、近年では、転売されたり、安易な修復により裏書などが保管されず処理されてしまう例も少なからずある。実際、いくつもそのような状況に遭遇してきた。虫損、水損で貴重な史料そのものが一刻を争う状況で発見されることも少なくない。史料そのものの価値が認識されていない場合、このような状況に陥ることは決して珍しくないのである。

文化財の価値というと、とかく歴史的に古いものばかりが注目される傾向にある。しかし、江戸時代の写本や絵画史料の裏書なども、その寺の歴史を伝える数少ない史料であり、もっとその価値が認識されて然るべきである。**危機意識をもって、史料的価値を見極めながら早急に対応し、研究を進めていくことが、一つでも多くの史料の救出につながると考えている。**またこのような研究をなくしては文学研究の進展も期待できない。いつどのような人物が、どのようにその信仰を広め、伝え、人々はそれを受け入れていったのかという研究は、文学作品の成立や受容の問題と深く関わっている。

本研究の遂行により、これまで明らかにされてこなかった青蓮寺の寺史が浮かび上がり、個々の所蔵史料がその歴史の中でどのように結びついてきたかが少しずつ見えてきた。中将姫説話をどのような人がどのように語り伝えていたのか、その一端を確認することができた。このような基盤となる研究があってこそ、先に述べたような次なる課題へとステップアップできる。

フィールドワークは足が基本であり、車では通れない山里をまる1日歩くことも珍しくない。歩きながら考え、人と出会い、調べを進めていく。私事ではあるが、2~3歳の息子を夫と交代で背負って歩きながらの調査、子どもの様子を窺いながらの論文等の執筆は、かなりハードなものである。しかし、だからこそ時間も出会いも一つとして無駄にできないという強い想いと責任がある。筆者は幸い専任教員として勤務しながら、夫の協力を得て育児を乗り切っている。育児は大変ながらも楽しいものである。人生には、育児や介護など様々な課題に向き合わなければならない時期がある。**性別年齢問わず、どのような状況にあっても、研究者として精力的に研究ができる環境作り、研究を再開できる環境作りは重要であると感じている。**

今年度、支援者の方々の温かなサポートによって、例年に比べ多くの研究成果を出すことができた。特に、一般の方々にも見ていただける形で最新の研究成果をブックレットにまとめることができたことは、大きな喜びでもあった。このような研究ができる環境へと導いてくださった支援者の皆さまに心より御礼申し上げたい。今後も研究が実社会に結び付く有益なものであることを確認しつつ、着実に進めていきたいと考えている。

今後も強い意志と希望を持った多くの研究者への温かな御支援を、何卒お願い申し上げる次第である。